

伊東 基 (いとう・もとい)

1、プロフィール

ドイツ文学者。兄で養生会医師の伊東重とともに、文学結社「竹栖社」を興し、その雑誌「田舎新誌」にドイツ小説の翻訳を載せる、ドイツ語の教授としても活動。

<生没>

1862(文久2)年～1925(大正 14)年

<代表作>

「白鳥奇談」(翻訳、ドイツ小説)

<青森との関わり>

弘前出身。医師で弘前市長も務めた伊東重は兄。作家今東光の母あやは伊東家の出で基の妹にあたる。

2、作家解説

津軽藩医師伊東家久の家に生まれる。兄の重(1857－1926)と同じく初め医学を志し、東大予備門に進む。1888(明治 21)年、郷里弘前に開業していた重、竹内軌栄、跡地静夫らの医師・医学生とともに病院内に「竹栖社」を結成し、「衛生文学等の学芸諸科ヲ以テ互ニ智識ヲ交換スル」目的で同人雑誌「田舎新誌」を発行する。これは重が自ら提唱していた「養生学」の普及の意図もあったと思われるが、衛生講話の他、論説、漢詩文、和歌も掲載する趣味・教養雑誌であった。「田舎新誌」とはヤブ医者(すみか)というほどの意味だろうが、基はこれにドイツ小説の翻訳「独逸小説白鳥奇談」を五里霧中庵等の名で連載している。「サテモ婦人と息女は懼る懼る国王の前に出で、悲嘆の涙を浮べつつ、慈悲の判決を仰ぎけるに彼の腹黒きザクゼン侯、傍より一々答弁非難せしのみか、己が力臂を鼻にかけ、…」のような美文調の翻訳で、硯友社時代と呼ばれる当時の明治文学の流行の影響が色濃い。実「田舎新誌」は硯友社の「我楽多文庫」との交換もなさ

れていた。基は医学よりドイツ文学への関心が深かったと思われ、在学中に医学志望からついに文学部ドイツ文学科に転じた。卒業後は熊本五高、仙台二高などのドイツ語教授を歴任し、その後乞われてドイツのジーメンス社に入社したが、日本海軍高官への贈賄が疑われたいわゆるシーメンス事件に連座する形で退社した。帰郷後は病院の管理・事務を手伝うなどしていたが、不遇だったと伝えられ、1年も早く兄に先立った。

兄の重は、医学はもちろん、政治、教育の面でも郷土史に輝かしい名を遺す大人物だが、その陰でドイツ文学を愛し、ドイツ語教育の道に進んだ弟の基の方はあまり脚光を浴びていない。兄弟だからとその生涯を較べるのは慎みたいが、基の業績は未開拓な部分が多く、その評伝や作品研究は今後の展開を俟つほかない。